昭和7年「かつらぎ」表紙
(河合家蔵)

昭和4年の創刊から3年間は青畠の題字のみという極めてシンプルな表紙だったが、7年からは大和らしく、編集の河合子丑考案による「法隆寺古代瓦の摺物」がデザインされている。

昭和三年六月号「ホトトギス」で雑誌巻頭を飾った阿波野青畠の代表句「葛城の山懷に寝釈迦かな」は、結婚して大阪の都心に住む青畠が、故郷高取で日々眺めていた葛城山を懐かしみ詠んだスケールの大きな作品です。当時の俳人間で絶賛され、話題を呼びました。この快挙に青畠人気が沸騰し、八木（現南都）銀行の句会仲間や畠傍中学の同窓生達が一丸となって、青畠を選者とする俳誌「かつらぎ」を創刊します。

本展は、昭和五年から十六年まで、自宅を「かつらぎ」

発行所に提供された、奈良県橿原市大和八木の河合源一（俳号子丑）八木銀行員で青畠と同窓氏旧蔵資料を中心

に、青畠の俳歴と「かつらぎ」の変遷について辿ります。

青畠と虚子

「『かつらぎ』発行所資料に見る
昭和初期俳壇の盛況」

令和五年四月一日～令和六年三月十日

虚子記念文学館報

2023年5月
第42号

虚子と昭和初期を代表するホトトギス俳人(4S)による
「五大家俳句寄書」

高野素十「なきそめ今宵の虫はかねたゝき」
昭和二年十一月「ホトトギス」に入集し、句集「初鴉」「雪片」に収録。

水原秋桜子「雲海や鷹のまひゐる嶺ひとつ」
昭和二年二月「ホトトギス」に入集し、「葛飾」に収録。

高浜虚子「日の本の炭焼小屋や門の松」
大正十四年
昭和二年九月「ホトトギス」に入集し、「凍港」に収録。

阿波野青畠「髪撫でるかたちつくりや和布売」
大正十五年六月「ホトトギス」に入集し、「萬両」に収録。

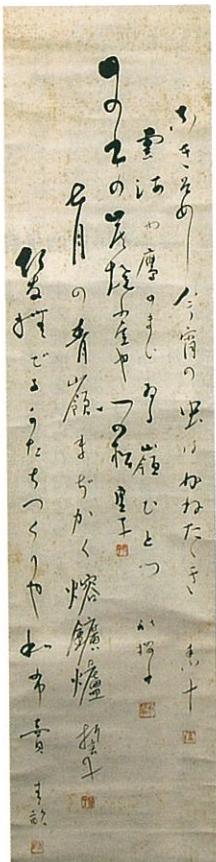
山口誓子「七月の青嶺まぢか溶鉱炉」
大正十四年
昭和二年九月「ホトトギス」に入集し、「凍港」に収録。



頭文字が皆 S で始まる 4S と虚子の短冊

昭和6年4月6日、大阪江戸堀「播半」にて開催された
「萬両」出版記念祝賀会

前列左から山口誓子、池内たけし、虚子、田中王城、青畠、木里嘯天。後列左から中井五刀、中谷鳩十、河合子丑、日野草城、奈良鹿郎、後藤夜半、富岡犀川、原田且鹿。

青畠第一句集「萬両」昭和6年4月 1円70銭
見返しは山口八九子による木版手刷の「萬両にうさぎ」。
青畠はこの絵を見て句集を「萬両」と命名した。

「かつらぎ」の変遷と青畠の俳歴

昭和初期を代表するホトトギス作家の一人で、俳誌「かつらぎ」を主宰した阿波野青畠は、旧姓を橋本と称し、八木（現南都）銀行高取支店長であった父長治と母かねの五男として、奈良県高市郡高取町に生まれました。六歳頃に罹かった中耳炎が原因で、左耳が特に遠いというハンデを負いましたが、畠傍中学二年（十五歳）の頃より「秀才文壇」に文章を投稿したり、俳句に興味を持ち、大正四年からは「ホトトギス」を愛読。「ホトトギス」の「地方俳句界」の欄で、雑説に入集する大和郡山の浜人が自宅で句会を開いていたことを知り、十六歳の青畠は当時郡山中学の英語教師であった原田浜人に手紙を送り、休日には浜人宅を訪問して俳句指導を受けました。

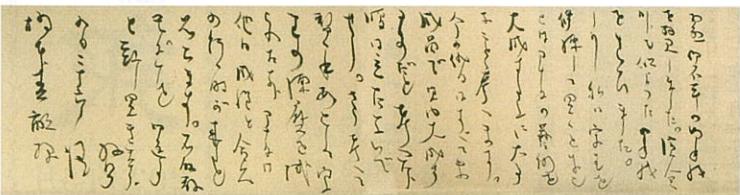
浜人短冊「雪靄の立ち籠め暮るゝ庵かな」（野風呂記念館蔵）



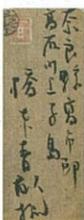
別天閣が江戸期の俳書研究を掲載していた「倦鳥」



別天閣短冊「とありしかくありしなど秋の風」



大正8年9月26日 橋本青畠宛虚子書簡（複製）

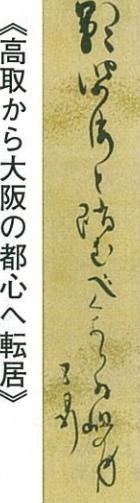


封筒表

裏

拝啓 御不平の御手紙を拝見しました。浜人君からも似よつた御手紙をもらひました。しかし私は写生を修練して置くといふことは、アナタの芸術を大成する上に大事なこと、考へます。今の俳句はすべて未成品で、其内大成するものだと考へたら腹は立たないでせう。さう考へて暫く手段として写生の鍛磨を試られたなら、あなたは他日成程と合点の行く時が来ると思ひます。不取敢其だけを御返事と致し置きます。敬具 九月二十六日 橋本青畠様

大正十一～十二年の青畠は、プライベートで大きな転機を迎えています。十一年十一月に八木銀行を退職し、翌十二年一月十二日に阿波野貞と結婚。阿波野姓を名乗り、自然豊かな高取から一転して、大阪西区京町堀の都心に移り住みました。



《高取から大阪の都心へ転居》



木国や青畠が投句していた石鼎主宰「鹿火屋」に学ぶ



翌大正九年五月からは、青畠が郷里高取「たかむち句会」の中心となつて指導。翌十年四月号「ホトトギス」には、短冊にある「口あいて」の句が入集し、青畠の初期代表句が生まれました。

「今後あなたの芸術を大成させる為だと思つて、今暫くは写生の技術を磨きなさい。そうすればきっとわかる日が来ます。」という虚子の言葉は、青畠の心に深く刺さりました。以後青畠は、虚子の言葉を信じ、写生の鍛磨に励んでいます。

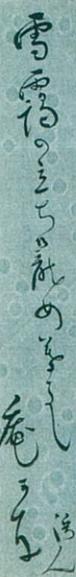
《高取の「たかむち句会」を指導》

「京都八坂神社の西門には、優美に立つ二体の随身（矢大臣）が控えており、老人の隨身は口をゆるく開け、若い隨身は口を閉ざしている。この老人の矢大臣がにこやかに親しみを湛えている様子が、初詣に向かう人々を出迎えるに大層ふさわしい。」と注がります。

《石鼎主宰「鹿火屋」に学ぶ》

浜人が信濃に転居したことから、青畠は新たな師を求め、原石鼎の句会にも参加しています。石鼎は大阪毎日新聞社の依頼で毎月来阪しており、青畠も主観的石鼎の句に憧れていました。

正十年五月に創刊された石鼎主宰「鹿火屋」の誌友となり、投句しています。



昭和初期を代表するホトトギス作家の一人で、俳誌「か

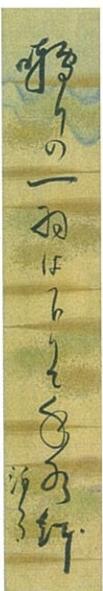
つらぎ」を主宰した阿波野青畠は、旧姓を橋本と称し、八木（現南都）銀行高取支店長であった父長治と母かねの五男として、奈良県高市郡高取町に生まれました。六歳頃に罹かった中耳炎が原因で、左耳が特に遠いというハンデを負いましたが、畠傍中学二年（十五歳）の頃より「秀才文壇」に文章を投稿したり、俳句に興味を持ち、大正四年からは「ホトトギス」を愛読。「ホトトギス」の「地方俳句界」の欄で、雑説に入集する大和郡山の浜人が自宅で句会を開いていたことを知り、十六歳の青畠は当時郡山中学の英語教師であった原田浜人に手紙を送り、休日には浜人宅を訪問して俳句指導を受けました。

《山茶花》「ホトトギス」で高成績

写生を磨く上で野村泊月の温雅な句風に感ずるところのあつた青畠は、大正十一年一月に京都の泊月宅を訪問し、「芭蕉七部集」等を読んで古格を学ぶよう助言をもらいました。以後泊月が選者をつとめる大阪のホトトギス系俳誌「山茶花」の同人となり、後藤夜半、日野草城、田村木国、皆吉、爽雨といった関西ホトトギス俳人達との交流も、本格的に始まりました。泊月は、青々や月斗の勢力が圧倒的であつた大阪俳壇に、



泊月が雑詠選者をつとめる
「山茶花」



泊月短冊「囁りの一羽は下りて手水鉢」

「ホトトギス」の地盤を創るために尽力した、虚子古参の俳人です。大阪にまだ慣れないと青畠を、温かく迎え入れてくれたのでした。

4Sの四人に選者を請う俳誌は多く、青畠も和歌山県西牟婁郡田辺町の福本鯨洋が主宰する「蜜柑樹」の雑詠選者をつとめています。ただ昭和に入つてからの青畠は、妻の入退院に付き添い心身共に疲れ果てていたことから、昭和二年十月号をもつて選者を退任。「蜜柑樹」は次の選者が見つからず、終刊となつてしましました。戦前の「蜜柑樹」は残存数が極めて少なく、大変貴重な俳誌の一つです。

《葛城》の句が話題に

青畠短冊「葛城の山ふところに寝釈迦哉」(野風呂記念館蔵)



家庭と本業に忙殺されではいましたが、昭和三年六月号「ホトトギス」において、青畠は七回目の雑詠巻頭を獲得。「葛城の山懷に寝釈迦かな」は、最も著名な青畠句となりました。葛城山は高取の実家から真西に見える、青畠にとって慣れ親しんだ山。この「葛城山の山中の寺に掲げられた涅槃像」というべきところを、敢て省略を重ね、まるで寝釈迦が山懷に寝そべっているかのような、大きなスケールの望郷句となっています。

《大和に点在した俳句会が集結》

「写生の修練」を磨き続けてきた青畠の俳句は、大正末から一気に開花します。「山茶花」十二年一月号にて、青畠は見事雑詠巻頭を獲得。その後も快進撃は続き、大正十四、十五年の二年間は、なんと年に六回も巻頭を飾っています。

さらに「ホトトギス」においても、大正十三年六月号の雑詠初巻頭を皮切りに、三年間で巻頭六回という好成績でした。

大正末から昭和初期にかけての「ホトトギス」において、青畠と前後して常に上位を競い合っていたのが、水原秋桜子、高野素十、山口誓子の三人です。この三人は俳号が皆Sで始まるところから、山口青邨が「4S」と命名して有名になりました。しかし、そもそもこの四人の火付役は、泊月だつたようです。京都市高倉一條に千種屋という美術商で始まるところから、山口青邨が「4S」と命名して有名になりました。大家俳句寄書半折」(国版1頁参照)頒布会を実施。「ホトトギス」を盛り上げるためのイベントでもありました。

《昭和四年一月、「かつらぎ」創刊》

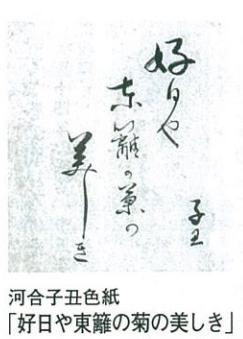
こうして昭和四年一月、「かつらぎ」が創刊されます。誌名は勿論、青畠句に因んで命名されました。編集発行人は桜井他数名が受け、発行所も桜井宅に決まりました。創刊号は「萬両」、十五銭、投句数百三十五、同人三十六、誌友

4年4月から3年間は「かつらぎ」表紙でスタートしています。幸運なことに同じ年に十一月二十四日、第三回関西俳句大会の吟行に飛鳥が選ばれ、虚子をはじめ全国から二百人以上の俳人が集結して久米寺で句会し、橘寺、岡寺を経巡りました。この吟行を機に「かつらぎ」の知名度は一気に上がり、投句数も四百を突破しています。



昭和4年4月から3年間は「かつらぎ」表紙でスタートしています。幸運なことに同じ年に十一月二十四日、第三回関西俳句大会の吟行に飛鳥が選ばれ、虚子をはじめ全国から二百人以上の俳人が集結して久米寺で句会し、橘寺、岡寺を経巡りました。この吟行を機に「かつらぎ」の知名度は一気に上がり、投句数も四百を突破しています。

《発行所は桜井宅から子丑宅へ》



「かつらぎ」一周年号が上梓された頃、桜井家が家庭の事情で編集発行から手を引かざるを得なくなり、昭和五年二月号からは、編集発行人が清水澄南、発行所は子丑宅へと移転します。以後

《青畠第一句集「萬両」の上梓》

「かつらぎ」も三年目を迎えた昭和六年四月九日、青畠第一句集「萬両」が出版されます。見返しは山口八九子による木版手刷の「萬両にうさぎ」(国版1頁参照)で、この絵を見た青畠は、句集名を即「萬両」と命名したといいます。大正六年から昭和五年までの四百七十六句を年代順に収録。題字は青畠好みの活字をわざわざ上海から取寄せた河合子丑、藤本一誠、古川迷水らは大和各地の俳人に投句を呼びかけ、発起人約三十名による総決起集会には、堺で「泉」を主宰する山本梅史も駆けつけてくれました。

《日本新名勝俳句帝国風景院賞》

「萬両」の上梓と同じくして、青畠にもう一つ嬉しい出来事がありました。東京日日と大阪毎日新聞社が大々的に募集し、虚子が選をした「日本新名勝俳句」(昭和六年刊)にて、琵琶湖浮御堂を詠んだ青畠句「さみだれのあまだばかり浮御堂」が、見事帝国風景院賞(トツ

「**20**」を受賞したのです。「浮御堂には樋がなく、屋根からすぐに湖水へ雨がボタボタと流れ落ちる。堂の周囲のみ水輪が忙しく出来ている。雨だれに取り閉まれながら、湖中の堂に一人佇む孤独を愉しみつつ詠んだ句である。」と自注があります。

《進歩党誓子と保守党青畑の二党時代》

青畑の妻貞は、



昭和8年「かつらぎ」
表紙（河合家蔵）
題字は青畑風に揮毫
した誓子の字

昭和9年「かつらぎ」
表紙（河合家蔵）
題字は青畑の字

昭和八年一月に養生先の住吉で急逝しました。心労多き青畑を助けてくれたのが、同じくSの一人である青畑です。誓子は昭和六年九月号から九年の二月号まで、「かつらぎ」客員として近詠や俳論を発表し、しつかり指導してくれました。「青畑と誓子という正反対の二人による化学反応を見たい」という奈良鹿郎の計らいにより実現したのだそうです。

誓子の句で著名な「かりかりと蝙蝠蜂の顔を食む」も、「かつらぎ」が初出です。誓子の句風は絶えず変化し、「ア

サヒスケートリン



誓子自筆句稿
(河合家蔵)
「かつらぎ」昭和8
年5月号掲載

また、「連作」についても「かつらぎ」で選句発表しました。「連作句廊」で選句発表しました。

《蘆火終刊後、旭川は「かつらぎ」中心に活躍》



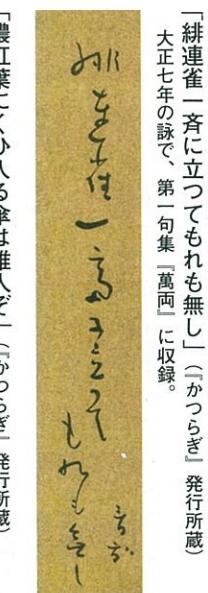
旭川画「世田谷九品仏山門」原画
(河合家蔵)
「かつらぎ」13年9月号

誓子が「京大俳句」へ活動拠点を移して去った後の「かつらぎ」を支えた指導陣に、皿井旭川を挙げることが出来ます。旭川は大正十年より絵を自習し、十三年より「ホトトギス」に投句。

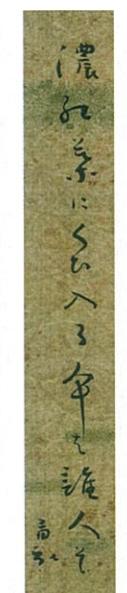


皿井旭川がさらさらと描く様子を見守る関西俳人達。旭川の右が鈴鹿野風呂、斜め上に河合家蔵が泊月の後ろに見えている人物が青畑。（河合家蔵）

「**山茶花**」「**かつらぎ**」を中心活動しました。旭川選吟行句投句欄「写生帖」も、「**蘆火**」から「**かつらぎ**」へと移行しました。耳鼻咽喉科医院を開業する旭川は、青畑のよき主治医であり、青畑は旭川に感化され、昭和九年頃より俳画を始めています。旭川の本格的参画で屏絵が定着し、挿絵や文章も増え、



「濃紅葉にくひ入る金は誰人ぞ」（「かつらぎ」発行所蔵）
大正八年の詠で、十二月「ホトトギス」に入集し、「萬両」に収録。



「十六夜のきのふともなく照しけり」
昭和四年の詠で、十二月「かつらぎ」と「ホトトギス」にて十一回目の巻頭を飾り、「萬両」に収録。



「かねのゆいと、わやなまく」（「かつらぎ」発行所蔵）
大正十一年の詠で、十五年三月「ホトトギス」に入集し、「萬両」に収録。



「秋雨や二つ見出で、峠の薦」（野風呂記念館蔵）
大正十一年の詠で、十二月「ホトトギス」に入集し、「萬両」に収録。



「かねのゆいと、わやなまく」（「かつらぎ」発行所蔵）
大正十一年の詠で、十二月「ホトトギス」に入集し、「萬両」に収録。



「今日の月長いすゝきを活けにけり」（野風呂記念館蔵）
昭和四年の詠で、十一月「かつらぎ」に入集し、五年一月「ホトトギス」にて十二回目の巻頭を飾り、「萬両」に収録。

以上、初期「かつらぎ」に欠かせぬ、誓子、旭川、富岡犀川・砧女夫妻を紹介しました。最後に、心地よいズムと感受性豊かな青畑句を、自筆短冊と色紙で御渝み下さい。
（学芸員 小林祐代）

第六十六回 六甲会

(令和四年六月三日) 稲
第六十六回六
（寅太郎先生出句）
馬鹿の國でふ和平にも
いたき餌舟の國でふ平和にも
らかな汀子の笑顔溢る館
月馬鹿夢に出て来ることも無く
封群れて宴始まりさうな池

（廣太郎先生出包）
館の庭閉ざされしまま四月馬鹿
学びたき蝦夷の国で平和にも
麗らかな冴子の笑顔満る
四月馬鹿に出て来ることも無く
蝦夷群れて宴始まりうな池

第二句會入選句

蛇無粹二人の仲に水をさす
旅半ばはみだりやしづになる夏帽子
網棚にみたび忘れし夏帽子
蛇踏み話し蛇を駆け下り来
神木に現て又消ゆ白き蛇
夏帽子目深にからり素通りす
蛇の腹脇らんで枝に伸びりし
師をおくはして蛇消ゆるまで息止めし
追ひつぶして合戦の輪轡き揺れし
恐るるは蛇とて同じかも知れず
夏帽子や旧居留地のミンドウ
頬までも被ふ夏帽庭の妻
太梁をそのそ歩む青大将
暮れ残り渡る水尾
蛇に合ひ犬吠えつづけ後水尾
夏帽子忘れし悔を持ち歩く
夏帽子被り直して出る投手ふも
怖いもの見たさの其向ふも
跡の壁にとぐろの青大将
ジヤイアンドのリボンのねて蛇を振り回し
外野席野次に振り向く夏帽子
こぼこなづら好みの風の夏帽子
夏帽子の壁にとづかの沙汰
蛇といふ声に反応して疎む
太陽を乗せて少女の夏帽子
鮮明な記憶と褪せし夏帽子
蛇の衣からでか踏んでるる女
隠したき心隠して夏帽子
大嫌いな蛇を説みとはいはいたり
蛇の出し道と聞きみははいたり
裏表間迄も遁づく蛇の道
姿勢良き船を線に蛇蹴り
姿勢良き船を線に蛇蹴り
心には飼はず庭には青大将

夏帽子店にあるだけ試着して
寄り添うて波音の夫もなく帰渡る
くちばしはや神より賜ひたる姿
客帰りホテルの部屋の夏帽子
目立ちたなく自立つ夏帽子
太目らしく天井を這ふ蛇の音
伝説の真実を説く蛇白し
咬まではも苦難より脱だと言はれても
くちばしはや神より賜ひたる姿
湖の風のままなり夏帽子
○この日より財布に入れし蛇の衣
波音を鐸に替へ夏帽子の風
夏帽子の覚えてをりぬ木曽の風
○蛇は住み統吉の子は住み替はる
お前こそ統吉の仇と蛇追ふ
手足捨てでながらもしどこへでも自在
○蛇現れてなどと頗りにならぬ彼
追ふ子らの喚声流し蛇泳ぐ
夏帽を取り寝の白砂踏む
砂丘越え海喜ばず夏帽子
夏帽子似似はやくとも少かせなく
卒寿には卒寿の粒よ夏帽子
主逝き青大将の統ぶる庭
廣太郎先生出立 ◇
虚子館の蛇と忠へば愛しかり
夏帽を振り護衛艦出港す
蛇逃げる聖母に跨まれたくなくて
くちばしはや神より賜ひたる姿等の列
主逝き青大将の統ぶる庭

試すだけ試して買はず夏の引き返す
蛇捕りのここら匂ふと草を指す
蛇恐怖症で止められぬゴルフ
青大将毒持たぬて撫でてみし
庭に蛇の行方の氣になりし
着はつと蛇もはたちろぐ悲鳴かな
流す音は斜めにバナマ帽
汀子邸水音涼しく撫かし
蛇を首に二重にとる写真
泳ぎ渡りきったる写真
くちばしは這ふは代官屋敷跡
名苑の池面割りゆく青大将
行先に背筋伸ばして選ぶ夏帽子
夏帽子にはひやりと硬き蛇の腹
寄り添へばひやりと硬き蛇の腹
佐比壳野の暗ならはちよもまた
水をの子の絆を回すか否蛇よ
畦の風が舒しむる夏帽子
山頂の風が舒しむる夏帽子
美しきひと皮残し見る
垣根邊いはナマ帽となる話
垣根邊いはナマ帽見え又帰る
夏帽子忘れし悔の道長昇る
飯匙情捕りの袋蟲く島渡船
高原の風の形とて夏帽子
大切で魔の形とて夏帽子
夏帽子リボン水色スカートも
六甲の風水色で草帽もして夏帽子
おもしろい草帽もして夏帽子

第六十七回六甲会

(令和四年九月二日) 稲畑 廣太郎選

兼題「夜長・鈴虫」その他当季雜詠
第一句会入選句

第二句会入选句

- 廣太郎先生出句
表枝の變る木を待つ邸夜長
長い夜の電話詠でありにけり
鈴虫の夜を彩る音色かな
上州と撰津を繋ぐ旅夜長
もう聽けぬ鈴虫汀子邸の默

兼題「蕪汁・枯草」その他当季雜詠
第一句会入選句

もうひとつ先の橋まで行く夜長
鈴虫の菜食主義を貫けり

第六十八回六甲会

酒井近藤
湧水健六

- 第一句会人選句 兼題「蕪汁・枯草」その他

枯草の土の底なる命かな
枯朝に吾て一眼の合ひ乙女かな
板前の振りおりしたる蕪汁

枯草や水平線は金色に
二人分たりと京立てゐる蕪汁

まつたりと京立てゐる蕪汁
枯草に迷ひ込んだるアリスかな
味噌を溶く夫は真顔や蕪汁

遺跡野は風景で草枯るる
知る人ぞ知る愛妻の蕪汁

枯草に水音消えし芦屋川
移る事の枯草の黙る
眼と声の果ての言ふ猫とかぶら汁

枯草を轡に大地眠り初む
萬町を散らし跋謹とは学校す

ふうふうと朝の白さを蕪汁
蕪汁食ふ清閑の一日かな
持持ちだけボルシチ風の蕪汁

蕪汁とろみを旨味かな
まつ先に小さき中洲の草枯るる
枯草に座し野良猫と欠伸する
古里の母の流儀の蕪汁

蕪茎磨り下ろす人刻む
枯草の大地上命ひそみけり

みちのくの宿大鍋の蕪汁
枯れ枯れになはし枯草に力あり
石垣に春秋たはし枯草するる
枯草や計にありし日の笑顔あり

先づボンボンボンボンボンボン
枯草に朝日ちりばめ港町

枯草や潮のほる川きらめきて
かぶらすすり一案手や草枯るる
声あふすすべり一案手や草枯るる
枯草を纏へば青き命見ゆ

枯草の色を照らして夕日落つ
枯草や一日一得見つけ

枯草の根方の勢ひなほ
けふの日の意味あたむる蕪汁

草枯るる庭の戯言獨り
城壁に根付く年月草枯る
枯草を抜けタヌキ風はらみをり
風荒ぶタヌキ舌焼く蕪汁

鉄筋の精進料理蕪汁

面取りの母の手間ある蕪汁
上賀茂は漬物は處は蕪汁
枯草や赤貝見遣る煙中
令和の児童み夕朝の蕪汁
刈り取れるか刈り取らないか枯草よ
蕪汁掛ける様さき立こ飯
枯草にあの大ファーブル見つけたり
枯草や踏み声を持つ灯あり
枯草の匂なる生の息吹きあり
枯草の匂ひは遠き母の膝
枯草を避け食む山羊の舌
放たれて犬は枯草つけ帰る
枯草を搔き分けすむ里の山
寝不足の下への歓喜冬日和
枯草もやうら歩き転びけり
師は今宵伊勢海老か河豚フルコーキ
枯草に猫の寝息ゆく蕪汁聞こゆ
明日へと未来を繋ぎ草枯る
手も暖めば母似や蕪汁吹く利那
アドベント始む十二月
枯草を驚掴みして鎌の先
枯草の色に従ふ野の美景
枯草の抱へ込ひたる日のぬくみ
枯草や日輪仰ぎ風に伏す
雨上り枯草の香の底のはる
枯草に座し見るかきぬ石の貌
蕪汁とろりと聞いてゐる話
枯草の風に馴染味甚る
枯草や音小さくある芦屋
蕪汁啜る虎の歩みしき著の鑑
枯草の歩みのうちの鑑
搦りおろす手間を惜します蕪汁
枯草の置き場のとき芦屋川
サトカスの味噌味
蕪汁皮を剥くとか剥かぬとか
母許の大きさと捨てる日の匂ひ
枯草に重き歩となる下山かな
若き日の赤茶な汀子草枯に
萬葉左近の一年服す
一途なる人や昭和の蕪汁
枯草に啄むものあるらしく
同胞と母を恋ひつつ蕪汁
(廣太郎先生出句)
萬葉の歩手明日を信じつ
一匹の動物よがる枯草裡
蕪汁京おばんざいてふ甘さ
枯草枯に三代句碑の歴史知る
草枯に十字の墓の凜と立ち
枯草を飛び立つ枯草枯色に

荒川橋	黒田千賀子
高橋純子	山中鷦鷯
近藤麻理恵	山中鷦鷯
西村みどり	山中鷦鷯
西村あや	山中鷦鷯
高野さち	山中鷦鷯
小林志乃	山中鷦鷯
荒川橋	松若英理子
高橋純子	松若英理子
近藤麻理恵	松若英理子
西村みどり	松若英理子
西村あや	松若英理子
高野さち	松若英理子
小林志乃	松若英理子
荒川橋	長安悦子
高橋純子	長安悦子
近藤麻理恵	長安悦子
西村みどり	長安悦子
西村あや	長安悦子
高野さち	長安悦子
小林志乃	長安悦子
荒川橋	鎌野陽太
高橋純子	鎌野陽太
近藤麻理恵	鎌野陽太
西村みどり	鎌野陽太
西村あや	鎌野陽太
高野さち	鎌野陽太
小林志乃	鎌野陽太
荒川橋	河辺さち子
高橋純子	河辺さち子
近藤麻理恵	河辺さち子
西村みどり	河辺さち子
西村あや	河辺さち子
高野さち	河辺さち子
小林志乃	河辺さち子
荒川橋	森森喜恵子
高橋純子	森森喜恵子
近藤麻理恵	森森喜恵子
西村みどり	森森喜恵子
西村あや	森森喜恵子
高野さち	森森喜恵子
小林志乃	森森喜恵子
荒川橋	徳岡嘉喜子
高橋純子	徳岡嘉喜子
近藤麻理恵	徳岡嘉喜子
西村みどり	徳岡嘉喜子
西村あや	徳岡嘉喜子
高野さち	徳岡嘉喜子
小林志乃	徳岡嘉喜子
荒川橋	奥田好子
高橋純子	奥田好子
近藤麻理恵	奥田好子
西村みどり	奥田好子
西村あや	奥田好子
高野さち	奥田好子
小林志乃	奥田好子
荒川橋	山本祐太
高橋純子	山本祐太
近藤麻理恵	山本祐太
西村みどり	山本祐太
西村あや	山本祐太
高野さち	山本祐太
小林志乃	山本祐太
荒川橋	黒田千賀子
高橋純子	黒田千賀子
近藤麻理恵	黒田千賀子
西村みどり	黒田千賀子
西村あや	黒田千賀子
高野さち	黒田千賀子
小林志乃	黒田千賀子
荒川橋	酒井洋子
高橋純子	酒井洋子
近藤麻理恵	酒井洋子
西村みどり	酒井洋子
西村あや	酒井洋子
高野さち	酒井洋子
小林志乃	酒井洋子
荒川橋	石橋玲子
高橋純子	石橋玲子
近藤麻理恵	石橋玲子
西村みどり	石橋玲子
西村あや	石橋玲子
高野さち	石橋玲子
小林志乃	石橋玲子
荒川橋	加藤祐一
高橋純子	加藤祐一
近藤麻理恵	加藤祐一
西村みどり	加藤祐一
西村あや	加藤祐一
高野さち	加藤祐一
小林志乃	加藤祐一
荒川橋	黒田千賀子
高橋純子	黒田千賀子
近藤麻理恵	黒田千賀子
西村みどり	黒田千賀子
西村あや	黒田千賀子
高野さち	黒田千賀子
小林志乃	黒田千賀子
荒川橋	酒井洋子
高橋純子	酒井洋子
近藤麻理恵	酒井洋子
西村みどり	酒井洋子
西村あや	酒井洋子
高野さち	酒井洋子
小林志乃	酒井洋子
荒川橋	尾崎百合子
高橋純子	尾崎百合子
近藤麻理恵	尾崎百合子
西村みどり	尾崎百合子
西村あや	尾崎百合子
高野さち	尾崎百合子
小林志乃	尾崎百合子
荒川橋	山崎裕子
高橋純子	山崎裕子
近藤麻理恵	山崎裕子
西村みどり	山崎裕子
西村あや	山崎裕子
高野さち	山崎裕子
小林志乃	山崎裕子
荒川橋	黒田千賀子
高橋純子	黒田千賀子
近藤麻理恵	黒田千賀子
西村みどり	黒田千賀子
西村あや	黒田千賀子
高野さち	黒田千賀子
小林志乃	黒田千賀子
荒川橋	角子
高橋純子	角子
近藤麻理恵	角子
西村みどり	角子
西村あや	角子
高野さち	角子
小林志乃	角子

兼題「海苔・春雨」その他当季雑誌
第一句会入選句

兼題「海苔・春雨」その他の第一句会人選句

○ 海苔粗糸に抱かれ離れず潮の濺
春雨や共に濡れ行く人をならず
春雨に恋の鑑の濺け初める
春雨に選ぶ一番かき傘
春雨や相合傘をためらひて
海苔若狭風匂ふ浦日和

○ 頬杖と溜息春霖の憲怠
一巡のあひだにやみて春の雨
豆撒の目路に海苔粗糸遠ざかる
航行のあまねく通ふ海苔の海
干しだしてその場で焙り海苔問屋
荒夷の海苔搔き己が影を搔る
○ 有明の波ゆりかからぬ海苔育つ
海苔若干す風物詩もう失せにけり
航行の目路に海苔粗糸遠ざかる
日輪のあまねく通ふ海苔の海
干しだしてその場で焙り海苔問屋
荒夷の海苔搔き己が影を搔る
○ 海苔若干す風物詩もう失せにけり
海苔若の吃水線の危ふき荷
須磨浦の海苔粗糸數れへ旅芦屋
摘みし海苔太き管を以て場打へ
海苔若の吃水線の危ふき荷
須磨浦の海苔粗糸數れへ旅芦屋
摘みし海苔太き管を以て場打へ
○ 海苔漁の整然と海面区画
春雨や三千六峰うすぐもり
今何處東京湾の海苔採場
嵩高く海苔舟埋る朝かな
○ 昨日の香の日色艶麗海苔若年
つばかりの音色はこどり春の雨
傘さして乙女の心こどり春の雨
春雨の傘の内なる忍ぶ恋
ほろにかく冷めたコヒー春の雨
春雨や甘き匂ひも恋ひて
春の雨命の色のひかる庭
春雨や君と歩幅を合はせゆく
君より春の書の湿り春の雨
平らかに磯の香立てる海苔若場
春雨や共に冷めたとすつといたいから
食べされぬ歎へされない年の豆
鎖植伝ふ滴や春の雨
春雨や千本格子洗ひをり
エリゼーのために彈く娘春の雨
春雨の傘の湿り春の雨
見つめ合ふ五秒の無音春の雨
春雨や共に冷めたとすつといたいから
食べられぬ歎へされない年の豆
鎖植伝ふ滴や春の雨
海苔若葉や異国への若き漁師たち

○ 春雨や夫と連れ立つ六甲山に
春の雨地中のゆづくらを目に見ゆく
○ 鎧めくチエロのケーラス、春の雨
戻りてはまた出掛けゆく海若日和
ミスドリ一読むる所須磨明石
茫茫と海苔舟ひろびる須磨の雨
海苔舟を洗ふ漁師にかゝめ鳴く
海若は搔きの岩の数ほど人の数
海若を干す風垂水港
粹がつてをれぬ船の風
立て直す心うる行方を問ふかもめ
海苔舟の行方を尋ねる
春雨に絡まつてくるハ長調
海苔搔きし聞聞にひそと忘れ潮
海苔引けば生る有明海苔若頭
葉擦れしづかに神宮の歯觸に
海苔粗糞の一束一束に日の絡み
海苔に干す風天説へ説はるる
夕映えに染まる海苔粗糞戸の風
雨好きと云ひし母の忌春の雨
主な庭づくりの六甲会
野も山も喉を潤す春の雨
太古より海は半水海苔育つ
ミネラルの香り満ちたる海苔賣か
節分や春節に魯儀せり
海苔粗糞に光寄せる波頭
海苔粗糞に波の影濃き落暉かな
海苔湯のしあわべり包む春の雨
太古より海苔の網揚がる
天地の息吹聞こえし春の雨
映画館出れば余る春の雨
春の雨濡れゆめうしろかな
そこまで春雨傘に一人して
手入れ良き師の庭守りて春の雨
海苔舟を富士が見守る波の音
春雨や天張見守る波の音
一村の音寂として春の雨
海苔をすすりながら空を置き去りに
分け入りし春日奥山春の雨
バイエルの色をやうにゆく二人
春雨の一粒軽し涼
根の國の星の綺羅曳き海苔育つ
春雨や和傘を彈く音響
退屈な指揮のセレモニテの雨
海苔粗糞へ終日寄する波の詩
伝ふやくの温み春の雨
海苔の色擦らして波が引いてゆく
春雨や肩をだかれて屋根のうち
春雨の粒零れる薄き肩
勾配の緩き古墳や春の雨



「稻畑汀子俳句集成刊行委員会」により、その出版にご協力いただいた六百人あまりのご厚意により建立されました。右から高濱朋子氏、高濱初也氏、稻畑廣太郎館長

虚子記念文学館に咲く

花の歳時記

虚子・年尾・汀子三代句碑建立
令和五年二月十八日（土）、虚子記念文学館に建立された三代句碑の除幕式がとり行われました。

秋風や竹林一幹より動く

年尾（昭和十三年）

大空に伸び傾ける冬木幕

虚子（大正十五年）

月の波消え月のなみ生れつ、

汀子（昭和二十七年）

句碑は、記念樹の桂や枝垂梅、白椿、額の花、南天や万両など、季節の木や花に囲まれています。四月、吉野温泉元湯 小川様より、「白山桜（シロヤマザクラ）」の実生苗二本をご寄贈いたしました。一本は句碑の背に植樹しました。汀子先生が毎年楽しみにしておられた吉野山の桜が句碑を彩るようになります。

稻畑汀子俳句集成刊行委員会事務局長の高濱朋子氏、高濱初也氏、稻畑廣太郎館長が、虚子記念文学館に咲く花の歳時記として、この句碑を建立する式典を行いました。この句碑は、記念樹の桂や枝垂梅、白椿、額の花、南天や万両など、季節の木や花に囲まれています。四月、吉野温泉元湯 小川様より、「白山桜（シロヤマザクラ）」の実生苗二本をご寄贈いたしました。一本は句碑の背に植樹しました。汀子先生が毎年楽しみにしておられた吉野山の桜が句碑を彩るようになります。



選者と一般の部受賞者の皆様

第十六回虚子生誕記念俳句祭開催



◆令和5(2023)年度 虚子記念文学館休館日カレンダー◆

4月							5月							6月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
1							1	2	3	4	5	6		1	2	3				
2	3	4	5	6	7	8	7	8	9	10	11	12	13	4	5	6	7	8	9	10
9	10	11	12	13	14	15	14	15	16	17	18	19	20	11	12	13	14	15	16	17
16	17	18	19	20	21	22	21	22	23	24	25	26	27	18	19	20	21	22	23	24
23	24	25	26	27	28	29	28	29	30	31				25	26	27	28	29	30	
30																				
7月							8月							9月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
1							1	2	3	4	5	6		1	2					
2	3	4	5	6	7	8	6	7	8	9	10	11	12	3	4	5	6	7	8	9
9	10	11	12	13	14	15	13	14	15	16	17	18	19	10	11	12	13	14	15	16
16	17	18	19	20	21	22	20	21	22	23	24	25	26	17	18	19	20	21	22	23
23	24	25	26	27	28	29	27	28	29	30	31			24	25	26	27	28	29	30
30	31																			
10月							11月							12月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7	5	6	7	8	9	10	11	1	2	3	4	5	6	
8	9	10	11	12	13	14	12	13	14	15	16	17	18	3	4	5	6	7	8	9
15	16	17	18	19	20	21	19	20	21	22	23	24	25	10	11	12	13	14	15	16
22	23	24	25	26	27	28	26	27	28	29	30			17	18	19	20	21	22	23
29	30	31					25	26	27	28	29	30		24	25	26	27	28	29	30
														31						
1月							2月							3月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6		1	2	3	4	5	6		1	2	3	4	5	6	
7	8	9	10	11	12	13	4	5	6	7	8	9	10	3	4	5	6	7	8	9
14	15	16	17	18	19	20	11	12	13	14	15	16	17	10	11	12	13	14	15	16
21	22	23	24	25	26	27	18	19	20	21	22	23	24	17	18	19	20	21	22	23
28	29	30	31				25	26	27	28	29	30		24	25	26	27	28	29	30

休館日（印）毎週月曜日、祝日の翌平日、夏期、年末年始他
やむを得ず臨時閉館させていただく場合があります。
展示替期間中は、一部ご覧いただけない箇所もございます。

賛助会更新のお願い

会員の皆様には、令和5年度の更新をお願い申上げます。賛助会は、虚子記念文学館を応援してくださる方はどなたでもご参加いただけます。新規のご入会を歓迎いたします。開会にあたり、芦屋市長いたしました。開会にあたり、芦屋市長より選者を務める「諷詠」主宰・和田華凜氏より、「虚子が提唱した花鳥諷詠がどの句にもあふれている。大人の方はもちろん、青少年、幼稚園の方まで素晴らしい句を詠み、伝統俳句の未来は明るい」と選句総評が述べられました。

虚子記念文学館館報 第四十二号
編集・発行 虚子記念文学館
〒六五九一〇七四
兵庫県芦屋市平田町八一一一
電話（0797）二二一一〇三〇六
FAX（0797）三二一一三〇六
HP アドレス：<http://www.kyoshi.or.jp/>
e-mail アドレス：kyoshi@as.emailine.jp

- 令和5年度事業計画と決算
(令和5年5月)
- 令和5年度事業計画と決算
(令和4年5月)

館の運営には、皆様のお力添えが欠かせません。どうぞよろしくお願い申し上げます。

理事会・評議員会報告



座談会「私の好きな汀子五句」
右から黒川氏、森田氏、三村氏、稻畑館長

稻畑廣太郎館長が聞き役として、それを話し、その後、他の句への感想や鑑賞ポイント、エピソードなどを語りあう形式で、三者三様の十五句を鑑賞しました。

稻畑廣太郎館長が開催され、次のこと審議、決定されました。

（令和4年5月）